

Title	アートベース社会学へ
Sub Title	Toward the new way : arts-based sociology
Author	岡原, 正幸(Okahara, Masayuki)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2017
Jtitle	哲學 No.138 (2017. 3) ,p.1- 8
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	特集 : アートベース社会学へ 寄稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000138-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

アートベース社会学へ

Keio ABR 代表 岡原正幸

実証主義的な近代科学の屋台骨が揺らぐ中で、科学とアートの関わりはいくつもの試行錯誤に見舞われる。その一つがアートベース・リサーチ Arts-Based Research である。それは学術的な研究作業のプロセス全体で、とくに最終的なアウトプットにおいて文字媒体を主とするテキストではなく、写真、映像、パフォーマンス、ダンス、演劇、あるいは平面、立体、インスタレーション、アートプロジェクトなどの美術、サウンドや音楽、さらに文字媒体だとしても小説や詩や戯曲などの文学を媒体として公開される研究スタイルである（岡原・高山・澤田・土屋「アートベース・リサーチ 社会学としての位置づけ」『三田社会学』21号 2016）

2013年10月に、日本社会学会大会が28年ぶりに慶應義塾大学三田キャンパスで開催された。今回は僕が受験した大学院入試の直後だったが、今回は実行委員の一人として大会運営に携わった。しかし、僕のからだには、制度化された社会学会への不満がくすぶり、当時、キャンパスの目と鼻の先で自主的に運営していた「三田の家」というスペースで、オルタナティブ社会学会と銘打ったイベントを、日本社会学会大会に合わせて、有志の協力を得て、三日連続で朝から晩まで開催した。その詳細は「ABR 実践活動アーカイブ」に記載されている^{*1}。

オルタナティブであることのひとつは、広義のアートの利用、それも

^{*1} <http://alternativesociology.jimdo.com/>

アートによる学的表現を推奨することである。いわゆるアート実践を研究の本筋に植え込むことの重要性や必要性は、ここに再録した末尾の「宣言」に述べたとおりである。

ただしオルタナティブであることをただ標榜していたのでは済まないことがある。それは社会学という制度の中にどう立脚点をもつか、昔風にいえば、ノーマルサイエンスに成るか、端的にいえば、ABR 実践やその作品が、杜学会や関連学会でも発表され、さらにはそれをもって学位取得が可能になるということだ。これは若い研究者にとっては死活問題であり、看過できるものではない。自分自身の体験を思い返せば、感情社会学という視点や分野を80年代初頭に日本に紹介した時の周囲の反応が目につく。「感情ねえ〜、社会学にならないでしょう」。古典社会学者の議論から感情社会学の方向性を導き出すような自分の初期の仕事はそんな周囲を意識したゆえの産物だった。今回は、感情を等閑視してきた社会学への反旗といった次元の闘いではない。そのことはわかっている。

2016年10月に、九州大学で開催された日本社会学会では「アートと社会学の新たな接点 アートベース・リサーチの可能性と実践」という表題のテーマセッションを企画し、学会史上初めて、映像作品やパフォーマンスがそれ自体で学会発表として提示されることになった。活発な議論がなされ終了予定時刻を2時間も超過するというパッションを感じた。

それに先立つ2015年11月に「ABR研究会 (Keio ABR)」は立ち上げられている。それはABR実践のための研究グループであり、同時に、ABRを認知させるための活動を確信的に行う行動グループでもある。

ABR研究会 (AG ABR) とは「(科学) 言語のみによる研究活動では観察、把握、理解、伝達しえない生の有り様を探求するために、多様なアートワーク実践を研究活動の軸に据え、従来の人文社会科学では実現されなかった知や経験そしてその学びや公開の新たな仕組みを開拓、展開することを目的」

として2015年秋に設立された集団制作チームである。

AGは、ドイツ語でArbeitsgemeinschaft/gruppe、英語でaction groupを意味させている。Aktiengesellschaft（株式会社）の意は今のところない（笑）。通称Keio ABR。今回の『哲学』特集号自体がこの研究会の編集によるものだ。その点で、ひとつだけ、研究会の行動指針にふれておく。それは「著者性」にかかわるものである。近代的な署名、著者、作者という制度への疑義を、作品概念自体への疑義とともにこの研究会では意識している。集団制作ということで作者主体をあるひとつのグループとすることは珍しくはない。とはいえグループの構成員の名前を、今回の特集号のように、個別に掲載することも厭わない。むしろ、ABRが揺さぶるのは作品なるものの境界線である。

ワーク・イン・プロGRESSとして作品を見る、出来事として見る、上演として見る。それがパフォーマティブ社会学の原理であり、ABR実践の指針である。観客、鑑賞者、読者といった、とりあえずは作者側と区別される側に置かれてきた人たちを、作品を構成する側に置く。作品自体がその都度、協力者や鑑賞者を含めた現場で生成されると見る。たとえば、対話的構築主義にもとづくとされたインタビュー実践で得られた作品から、協力者を作者候補から外す理由が自明なわけではないだろう。まして、観客参加型のポストドラマ演劇、コミュニティデザイン、アートプロジェクト、アートアクティビズム、ソーシャリー・エンゲイジド・アートなどでは、作者・作品概念は揺らいでいる。ABR実践も、作品を实体として、どこか物理的な空間や時間に据えたら「はい、それまでよ」というわけにはいかないはずである。

作品は鑑賞されて初めて作品となる、そしてこの鑑賞という行為もアートベース社会学における新たな知の創生や学びにとっては欠かせないのだ。そしてこの鑑賞という行為が個人的な世界に仕舞われることなく、多様な人と共有され、作品自体がさらに共同で展開されることが望ましいの

だ、そのため、展示され、上演される作品をめぐる公共性（たとえば作者や観客による語り合いの場）もその都度、そして継続的に立ち上げる必要がある。そしてきっと、その中での語りの蓄積によって、アート作品をABRとして受容するリテラシーも育つことになるだろう。

多様な分野での多様な試みを詳述はしないが、一例をあげよう。アートプロジェクトについてである。熊倉純子ら（『日本型アートプロジェクトの歴史と現在』 2013 公益財団法人東京都歴史文化財団東京文化発信プロジェクト室）は、アートプロジェクトについて、次のような定義と特徴づけをしている。それらはすでに、社会性、プロセス、継続性、共同作業ゆえに脱近代的なアート観念を明らかにしている。

現代美術を中心に、1990年代以降日本各地で展開されている共創的芸術活動。作品展示にとどまらず、同時代の社会の中に入りこんで、個別の社会的事象と関わりながら展開される。既存の回路とは異なる接続/接触のきっかけとなることで、新たな芸術的/社会的文脈を創出する活動といえる。1制作のプロセスを重視し、積極的に開示、2プロジェクトが実施される場やその社会的状況に応じた活動を行う、社会的な文脈としてのサイト・スペシフィック、3さまざまな波及効果を期待する、継続的な展開、4さまざまな属性の人びとが関わるコラボレーションと、それを誘発するコミュニケーション、5芸術以外の社会分野への関心や働きかけなどの特徴を持つ。

この特集号では、ABR研究会が設立後の1年間で実践してきた活動を総括する意味をもたせつつ、研究会およびそのメンバーが各自の立場でABRに触れている姿をみなさんに伝えたい。澤田唯人は「なぞる」「なぞらえる」を丹念に吟味することで、他者を理解し、それを表現する行為において、アートと社会学の共通性をさぐる。高山真は十数年にわたる長崎の被爆者へのライフストーリー・インタビューと、その最中の自己体験を

交差させ、オートエスノグラフィとライフストーリーを論じる。後藤一樹は広島記念日に関する集団映像調査の中から、クロスナラティブズという視点により分析をおこなっている。中村香住はフェミニズムアートにかなえてより見出された ABR 実践を紹介し、当研究会による第一論文（冒頭の引用元）が提起したモデルを使ってフェミニスト ABR を検討する。岡原正幸は現代演劇の議論を参照しつつ、演劇的な手法による社会学のもつ身体と上演という主題を議論する。研究会では作品も制作しており、ひとつは土屋大輔によるインスタレーション、もうひとつは地域でのアートプロジェクト公募展へのプロポーザルである。土屋と坪井聡志が研究ノートとしてそれらを紹介している。

この特集を通じて、アートベース社会学が、広い意味で**身体的**のものであることも了解されるだろう。1980 年前後には身体（あるいは感情）を発見した社会学が 40 年近くも、身体的でもなく感情的でもないのは、おかしい。自分や他者の身体や感情をフル稼働させる社会学があってもいい時期だろう。

2017 年も様々なアクションを準備している。初春には南オーストラリア大学、A. エリオット教授からの依頼で、世界 4 都市（アデレード、ダブリン、ヘルシンキ、東京）を結ぶ音楽家ロイド・コールのサウンド・インスタレーションに参加協力。並行して Keio ABR TAV シリーズ「サイトスペシフィックと社会学」として、いわゆるアートギャラリーを舞台にしてレクチャーや上映、パフォーマンス、レクチャーパフォーマンスさらにはゼミ活動自体を「展示」という実験も行う。初夏からは日本演劇学会、日本カルチュラルスタディーズ学会、日本社会学会、アートミーツケア学会などの学会関係。とくに演劇学会、社会学会では ABR をテーマにするセッション、シンポジウムを準備中。論文や作品はもとより、講演会、ワークショップ、授業実践も目白押しである。慶應義塾創立 150 年記念未来先導基金 2017 年度公募プログラムに採択された「慶應 SKC (Super

Knowledge Campus) 計画」(代表 岡原正幸)の枠内でも学生主導による ABR 実践が多々行われる。さらに秋には一ヶ月以上の期間にわたり、Keio ABR Festival が企画されている。この慶應 ABR フェスでは、三田キャンパスや芝地域を舞台に、多種多様な ABR 実践が繰り上げられる。「三田キャンパスは大学を超える」がキャッチフレーズである。

冒頭の引用、その元になった論文のサブタイトルは、A Movement for Sociological Activities, つまり、ABR を僕らは、社会学をもろもろする上での「運動」として立ち上げようと考えている。そのためのマニフェストがこうである。

宣言 アートベース社会学あるいはパフォーマティブ社会学

私たちは社会学者である。そしてここに、アートベース社会学・パフォーマティブ社会学を宣言する。

1970 年代以降、科学の世界はみずからが依拠する哲学的な基盤あるいは信念を覆されてきた。クーンの科学革命論、フーコーの真理論、ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム論、いわゆるポスト構造主義やポストモダニズムの思想は、それまでの科学的な営みの正統性を疑わせるに十分な破壊力をもっていた。フィールドワークなどの経験的調査を重視する民族学、文化人類学でも、「文化を書く」ことの政治的な意味合いが問題にされ、いわゆる社会調査の客観性も疑われていく。社会学もこういった波に飲み込まれてきた。だが依然として、不可思議にも、社会学は自然科学を範とする実証科学を標榜しているではないか。それは不誠実であり不条理だ。

実証科学であることは、人間に関する学問ではかなり疑わしいものになったはずである。理論や推論や仮説、その検証といった科学的作業のサイクルだけでは、そもそも人間世界を理解することはできない。ひとつひとつの

部分に分断されて顕微鏡によって眺められる人間は、人間の部品であっても、人間それ自体にはならない。部分をいくら精密に説明しても、その全体である人間の存在や世界には届かないのである。社会学も、今まで、ジェンダーやエスニシティ、職業や階層といった集合的なカテゴリーで人間を理解してきたわけだが、それはつまり、部分としての人間への着目であって、決して、全体としての人間、生きられる人間を把握してきたことにはならない。

人間を全体として理解することは、一つの正しい解答や記述や提言を見つけ出すことではない。なぜなら人間は生ある限り、つねに変化し、状況に応じた姿をその都度で見せるからである。人間への全体的な接近といった作業は、過去二百年むしろアートに任されていたものである。文学、小説、ドラマ、詩、絵画や彫刻、ダンスや演劇、音楽、写真や映画など。アートは、人間をつねに全体として理解し伝えようとしてきた作業だといえる。その財産を社会学が利用しようと考えたとしても不思議はない。そもそもアートと科学が別れたのもたかだか数百年の話。

さらにその上、現実構成されるものであるという、構築主義的な哲学は「事実」と「フィクション」の境界さえ無効にしているのだ。事実を扱う科学、フィクションを創作するアート、という区分も意味がない。そしてまた、研究と呼ばれるものの成果を公表や公開するにあたって、学会などの科学者共同体内部でのコミュニケーションを優先することはもはやできない。より広範で多様な人々に向けて表現することが社会科学に要求されるようになった。その中で、アートを利用する研究、アートベース・リサーチ（ABR）の試みがすでに1990年代には登場することになった。

たとえば、オートエスノグラフィーは、すでに社会科学の言葉ではなく、自伝や日常語、さらには文学的で詩的な表現法を採用している。それは文学やルポルタージュにも接近している。朗読劇や演劇、ダンス、映像や映画という表現形式、つまりテキストだけではなく身体、声、動きを観客・読者が見ることによって制作される社会学も生まれつつある。

ABR (ABS アートベース社会学) とは、観客・読者を作者・著者の経験に、その作者・著者が経験してきた諸々の人々の経験に、参加できるようにさせる表現であり、事実を確定するものではなく、むしろ発見的なものである。世界のある側面をより深く複雑に理解することを可能にするのだ。それは命題を主張するものではなく、事態への洞察をもたらすものであり、その洞察によってはじめて研究上の言明も了解されるようになる。他者の経験への共感、人間の生の深遠なる意味を自らに取り込み、自ら自体の変容をもたらす、そのための必要条件だが、それをアートはもたらしてくれるのだ。

ABS、パフォーマティブ社会学は、作品がその展示や上演という出来事とは独立して存在するという発想を否定するものでもあり、客観的な事実が、社会学者や読者とは別にあり得るという発想をも否定するものである。ABS が提示する直接性や現在性は、近代的な道具的世界観さえ標的にすることができる。存在と外見、現前と再現前といった近代的な思い込みも崩すものである。パフォーマティブとは、その場その場で、その場にいる私たちによって、相互行為の達成として、作品も現実もつくられるということでもあるのだ。私たちはパフォーマティブであることを運命づけられてもいるのだ。

私たちはありふれた世界を「再び探る リ・サーチする」ことで、その新たな姿を見つけようとする研究者なのである。ここに私たちは、パフォーマティブ社会学者であることを宣言する*2。

ABR 研究会

<http://artsbasedresearch.jimdo.com/>

<https://www.facebook.com/ArtsBasedSociology/>

*2 『ニパフ 2013』(日本パフォーマンス・アート国際フェスティバルのカタログ)に初稿は掲載された(今回一部変更)。